

## 二つのタイプの「自然新聞」

矢野 亮\*

Two Examples of "Tabloid for Nature Study"

Makoto Yano\*

### はじめに

今やテレビ時代とはいえ、私たちは毎日、新聞から世の中のさまざまな出来事や日常生活に役立つ情報を得ている。それほど、新聞は私たちの生活の中で、情報伝達的手段として欠かすことのできないものとなっている。

もっとも、新聞の内容は、政治・経済・社会の問題と多岐にわたっていて、自然に関するものは僅かであり、また、取り上げられているものとしても内容は季節のトピックス的なもの、珍しいものに偏する傾向があり、私たちの身近な自然を取り上げているとはいえない面がある。

そこで最近、身近な自然を素材とした“自然新聞”作りが自然観察の一つの手法として取り上げられるようになってきた。

これまでに自然に関する新聞としては、1927年ソビエトの動物学者ビターリー・ビアンキによって書かれた「森の新聞」、三浦半島自然保護の会発行の「自然のたより」、平塚市博物館発行の「自然の新聞」などがある。

筆者等は、昭和63年から平成4年までの5ヶ年間にわたり、国立科学博物館の主催する青少年科学活動の中の一つのテーマ「自然新聞を作ろう」でこの活動に参加してきた。

また、筆者は、昭和61年から平成4年の7ヶ年間にわたり、関東学院女子短期大学の幼児教育科の授業の中で「自然新聞〈幼児版〉」の作成に携ってきた。前者は、児童・生徒を対象とした“指導作成型”、後者は、短大生を対象とした“自主作成型”といえる。

これまでの経緯をふまえ、本稿では自然新聞作りの意義や過程について述べたい。

### 自然新聞作りの意義

自然新聞を作るという目標があると、新聞記者になったつもりで、何か出来事はないかと好奇の目で自然を探るようになること、また、スケッチをしたり写真を撮るなどして自然をよく観察すること、さらには、図鑑や参考書などで調べることにより自然をより深く理解すること、この他にもわ

---

\* 国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum

かりやすい文章やレイアウトで表現することなど、理科の学習に止まらず国語や図工などの教科にも及ぶと考えられる。

また、この種の新聞は、幅広く配布されるわけではないが、家族・友達など周囲の人々に読んでもらうことによって、身近な自然を理解する人々の輪も広がるという効用も期待される。

## 児童・生徒の作成例

### 青少年科学活動とは

青少年科学活動は、昭和61年より国立科学博物館主催で実施しているもので、目的は、青少年が体験的活動を通して、科学についての知識を広めるとともに、異年齢層(小学校4年生から中学3年生までが対象)の相互の連帯感を深めるということにある。

内容は、基礎的な知識や技術を養う「青少年科学教室」、グループで自主的に活動する「青少年科学グループ活動」、参加者全員が集りそれぞれの成果を発表したり、意見交換を行なう「青少年科学会議」の3つの活動から成り立っている。

動物・植物・岩石鉱物・化石・人類・理工・自然観察などのコースがあり、筆者らは、自然観察コースの『自然新聞を作ろう』というテーマで、昭和63年よりこの活動に参加している。参加児童・生徒数は、昭和63年29名、平成元年25名、平成2年26名、平成3年21名、平成4年27名であった。学年別で見ると例年、小学校4～5年生が約4分の3で残りが小学校6年生、中学生であり、比較的低年齢層が多いという傾向がある。

### 青少年科学教室

青少年科学教室では、これまであまり自然に接する機会の少ない児童・生徒に、自然の見方や調べ方などの基礎的な学習をする(表1)。つまり豆記者を養成する活動といえる。

まず初日は、オリエンテーションのあと、フィールドをよく知るために、自然教育園の中を歩き、どんな植物が生育しどんな動物が生息しているか、また、どこが何という地名かなど、フィールドの特色や自然の見方を学習する。そして、ところどころで、スケッチをしたり、写真を撮ったり、双眼鏡の使い方を学習したりして、取材活動の基礎的な技術も身につけるようにしている。

2日目・3日目は、それぞれ専門の職員から動物の調べ方・植物の調べ方・微気象の調べ方を学ぶ。

動物の調べ方では、自然界の掃除屋の仲間を知るために、虫の落とし穴をしかけ、翌朝落とし穴に落ちた虫の種類や数を調べたり、ヒキガエルの糞を分析し、ヒキガエルの食べものを調べた。

また、植物の調べ方ではヤツデの葉の大きさ・葉柄の長さ・葉柄の出る角度などを調べ、ヤツデには全ての葉に光が当たるような工夫があることを学んだり、つる植物の巻き方にはいろいろな方法があることを学んだ(図1)。

また、微気象の調べ方では、森林・草原・建物の周辺・道路などいろいろな場所で温度を測り、環境のちがいにより温度がちがうことを理解したり、発泡スチロール製の雨水浸透実験装置で、環境のちがいにより土の保水力や濁り具合のちがいを



図1 ヤツデの葉の調査をしている様子

などを学んだ。

このように、自然をただ観察するだけではなく、自分たちでじっくりと調べ、動・植物の生活・自然のしくみ、さらには自然と人間の間接的な関係などを考えることは、児童・生徒にとってもあまり経験がないように貴重な体験であったようだ。

表1 青少年科学教室の日程と内容

日 時	学 習 項 目	学 習 内 容
7月25日(水) 10:00~17:00	オリエンテーション	・全体のスケジュールの説明
	自然の見方	・自然教育園内を歩き、自然の見方を学ぶ ・スケッチのし方、写真の撮り方を学ぶ
	動物の調べ方	・虫の落とし穴、人工樹液、花に集まる虫、ふんの分析などの調査・実習を通して動物の調べ方を学ぶ
7月26日(木) 9:00~17:00	植物の調べ方	・つる植物の巻き方、葉から出る水の量、ヤツデの葉などの調査・実習を通して植物の調べ方を学ぶ
	微気象の調べ方	・気温、雨のゆくえ、光と植物などの調査・実習を通して微気象の調べ方を学ぶ
7月27日(金) 9:00~17:00	まとめ	・調べた結果のまとめと各自の発表

表2 青少年科学グループ活動の日程と内容

日 時	学 習 項 目	学 習 内 容
8月1日(水) 10:00~17:00	オリエンテーション	・新聞の大きさ、ページ数などを決める ・担当係を決める
	自然の取材	・グループ毎に自然の出来事を取材する
	グループ会議	・グループ毎に掲載したい記事を選ぶ
	全体編集会議	・記事が重複しないように全体で調整する
8月2日(木) 9:00~17:00	自然の取材	・決った記事についてさらに詳しく取材したり、スケッチをしたり、また、資料を調べたりする
	自然の調査・結果のまとめ	・各グループ毎に必ず一つは自分たちで調べた結果を記事にする
8月3日(金) 9:00~17:00	自然新聞作り	・項目を決め、何をトップにするかなどを決める ・記事の長さ、スケッチ、写真の大きさから、紙面の区割りをする
	まとめ	・各グループでできた新聞を発表する ・青少年科学会議の準備

### 自然新聞づくり

前半3日間の「青少年科学教室」で豆記者の養成も一応終り、いよいよ後半3日間の「青少年科学グループ活動」で自然新聞づくりが始まる(表2)。1

グループ5~6人で全体で5班が編成され、グループごとに編集長・写真係・記者などの役割分担を決め、その後は編集長を中心に取材活動に入った。

自然教育園内を歩き、自分たちが発見したことを取材カード(図2)に書き込んでいく。いつ・どこで・何が・何をしていたか。また、その他に気がついたことを書いたり、スケッチをしたり、写真を撮ったりして取材活動をしていく。

取材活動が一段落すると部屋にもどり、グループごとに載せたい記事を選ぶ。そして、全体編集会議では、あまり記事が重複しないよう調整したり、自分たちで調べた結果を記事にする特集も決める。また、各グループごとの新聞名も決められる。

2日目は、決った特集記事、一般記事について再度現地で詳しく取材したり、スケッチしたり、また、図鑑や参考書で調べたりする。

3日目はいよいよ新聞づくりである。

A3の大きな2枚の白い新聞紙を前にグループごとに、特集はどう扱うか、何をトップ記事にするか、



### 参加者の反応

以上が、自然新聞ができるまでの6日間の活動の概要であるが、この活動に参加した児童・生徒の感想は、自然の調べ方や動植物の名前を覚えたこと、一つの事柄を長時間かけて調べたこと、専門の先生に直接現地で指導を受けたこと、いろいろな学校や他の学年の人と一緒に学んだことなど、ふだん家庭や学校では体験できないことを経験したようである。

また、この活動の終了後、国立科学博物館企画課でこの活動に対してのアンケート調査を実施しているが、その中で「参加した子供たちはどのような感想を保護者に話したか？」という問があるが、その一部を収録してみる。

「第一希望ではなかったのですが、まあ行ってみようぐらいに思って参加したが、一日目に帰宅しての第一声は『おもしろかった。明日が楽しみ』だった」

「学校での学習にはない異年令の集団でたいへん多くの事を学んだようである。内容も高度すぎず、良かったと思う」

「『ふだん入れないところに入った』とか、ヤツデの葉の数え方、カエルのふんの分析など毎日新しいことを学んできては教えてくれた」

「仕方なく行くという感じだったが行きはじめてみると、グループの人たちとも友達になって講習を楽しんでいた」

「野外活動ができたこと、実際に自分たちでわなをしかけたりできたことなど、学校では体験できないことが楽しかった様子。“雨のゆくえ”も実際にその目で確かめたりできたことが嬉しかった様子」

「毎日帰宅する度に『とても楽しかった』『今日は〇〇を教った』など、大変喜んでた」

「一人参加は不安だったが、第一日目から友達ができた。毎日学習内容を誇ったり、見せてくれたりして、新鮮な興味にあふれているようだった。6日間終わって涙ぐんだりしていた」

「第二希望のコースだったので少しがっかりしていたようだが、始まると楽しんでた。今までは虫が怖かったが、このコースのおかげで観察する対象として見られるようになった」

「毎回先生方の専門的な観察の仕方などが大変興味深かったようである」

「終了後『生き物って不思議だ。どうしてみんなちがう形をしているのに命があるんだろう』と命の不思議さを感じたようである」

「植物や動物などはあまり観察したことがなかったようで、自分の知らないことなどを観察できて楽しかったようである」

「珍しい体験(ふん調べは気持悪かったがおもしろかったなど)ができたこと、友達ができたこと、新聞づくりができたことなど、楽しいこととして話してくれた」

「初日は少々緊張していたが、あとは毎日楽しくて仕方なかったようである。特に虫の落とし穴のしかけと翌日の結果に興味を示していた。まだ、よくわからない分野もあったが夢中で楽しんだ。『また来年も出席したい』と言っている」

「いろいろな学校から同じことに興味を持った子たちに会えるのが楽しみなようだった。無学年制だったので中1の人と一緒に勉強でき、いろいろな知識を受けたり、面倒を見てもらったようだった」

「初めての参加なので長時間の観察についていけるのか不安だった。しかし、子どもは反対に一つの事柄に長時間かけて調べる楽しさを知ったようだった」。

以上がこの活動に参加しての感想であり、おおむね好評であったが、次のような酷評もいただいている。

「2日目くらいから行くのをとてもいやがった。6日間の間に一人も友達が作れなかったことが原因だと思う。出来上がった自然新聞を見せてもらったが、この程度のものであるのに、何日も遠いところから通ったのかと少々がっかりした。」

### 短大生の作成例

筆者は、昭和59年より関東学院女子短期大学幼児教育科の専門科目「自然」の授業を担当しているが、毎年夏休みの宿題として「自然新聞」作りを課している。

夏休み直前の授業の際、前年度作成の新聞の見本誌を示したり、作成要領を書いたプリント(図5)を配り、夏休み中に提出させている。また、提出後、作成過程における苦心点、反省点などを感想文に書かせている。

これらの資料をもとに自然新聞作りの苦心や成果などについて分析してみた。

なお、短大生の自然に対する認識やおかれている状況は、比較的自然的な環境に住み、過去に採集や飼育の経験を持つが、自然観察会などに積極

的に参加することは少なく、また、興味を持ち日頃接しているのは栽培植物やペットなどの飼育動物であり、野山の自然に触れることはほとんどないといった状況である。

この自然新聞作りは、大部分の学生が初めての経験であり、B4版の2枚の白い新聞用紙を前に夏休み中悪戦苦闘していたようである。それでも夏休み半ばに設定された締切り日にはほとんどの学生が提出している(図6)。

出来上がった新聞を見ると、自分の家のまわりを取材して今まで何げなく見逃していた自然を見直した人、信州・東北・北海道など帰省先や旅行先で新聞の記事を一生懸命探した人などさまざまであった。また、内容的にも草花あそび、四コママンガ、書評などを入れて、幼児にも読ませようとする工夫がなされているものも少なくない。今の学生はマンガにふだんから接しているせいか、じつにうまくイラストを書くものだと感心させられる。

あなたは新聞記者  
世界でたった一枚の  
“自然新聞”を作ろう

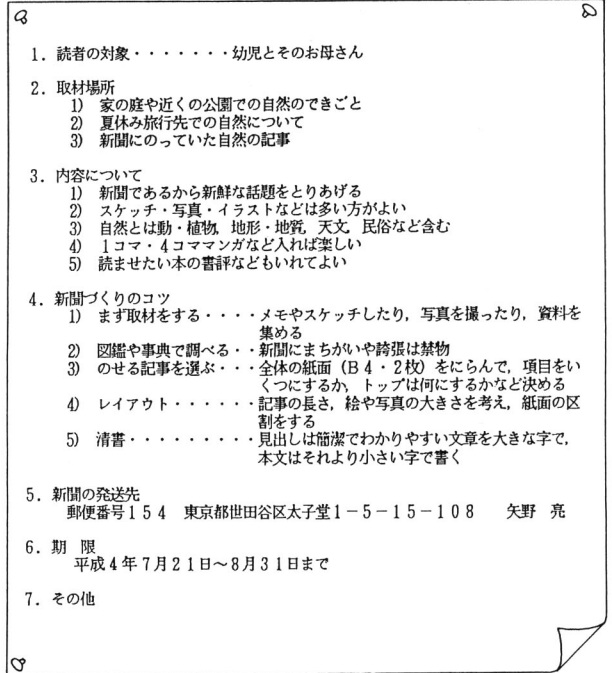


図5 作成要領を書いたプリント



図6 幼児と母さんの自然新聞

### 作成過程における苦心点・反省点

感想文は、自由記述形式なので、各項目の全体に対しての割合を示すことができないが〔 〕内に示した数字が多い・少ないの目安になると思われる。

なお、今回集計したのは昭和62年度・63年度で学生数はそれぞれ138名、120名の計258名であった。

#### 1)取材の方法

- ①写真を撮った〔74〕
- ②図書館へ行ったり、本で調べた〔60〕
- ③野外に出かけ自然について調べた〔47〕
- ④動物園や博物館などに取材に行った〔6〕
- ⑤人の話を聞いた〔4〕

取材の方法としては、写真を撮った学生が最も多かったが、後述するがその成果は芳しくなかったようである。この他、図書館や博物館に行ったり、本や新聞で調べたり、野外に出かけ実際の自然を観察したり、それぞれ苦労して取材していたようである。感想文の中から生の声を収録すると、

「となりの家の小学生とバケツ・タモ・ビニール袋を持ち、長ぐつをはいて、カメラを首にぶらさげて、自転車を二人乗りして川へ取材に出かけた」

「クワガタは夜しか出てこないで、毎晩のように外へ出かけチャンスを待っていた」

「トンボが川にいたので写真を撮ろうと半日ずっと待っていた。トンボについていろいろ詳しいことを発見した」

「2ヶ月分の新聞をすみからすみまで見たので部屋中新聞だらけになり、手もまっ黒になってしまっ

た」等々。

2)新聞作りでためになったこと

- ①自然の勉強になった [57]
- ②新聞作りは楽しかった [14]
- ③自然に関心を持つようになった [11]
- ④取材中いろいろな人と話をした [5]
- ⑤子供のころをなつかしく思い出した [4]

取材を通じて、身近な自然への目が開けたり、また、いろいろな人とのコミュニケーションも図れたようである。

「庭の植物を調べたが、出るたびにやぶ蚊にさされ大変だったが、でも我が家の庭もバカにならないと思った」

「市博物館に行き、話を聞いたり資料を探したり大変だったが、お陰で自分の住んでいる所がよくわかった」

「母と二人で散歩に出かけ、“これは何！”とききながら歩いたのがとても楽しく新鮮であった」

「本を見ながら自分で実際に虫を飼ってみたが、本通りにはうまく飼えなかった。でもこれが機会でも虫も好きになった」

「外で花を観察していたら、“何してるの？”と子供が話しかけてきて一緒に遊ぶことができた」等々。

3)新聞作りで苦労したこと

- ①何を記事にするか苦んだ [127]
- ②写真がうまく撮れなかった [53]
- ③絵を描くのが苦手で困った [31]
- ④欲しい資料を集めるのが大変だった [26]
- ⑤レイアウトに苦労した [24]
- ⑥字の数や大きさなどに苦労した [22]
- ⑦できるだけ絵や写真を使った [20]
- ⑧内容や説明を簡単にした [18]
- ⑨天気が悪くて野外の取材ができなかった [6]
- ⑩辞典によって違うことが書いてあった [1]

幼児とその母親を対象としたため、記事の選定や字や絵の使い方などに大変苦労したようである。また、撮った写真のほとんどがピンボケで使いものにならず、スケッチに変えたり、記事をボツにしたものも多かったようである。

「まっ白な紙を見て、何を書こうかと夏休中とても迷った」

「対象が幼児とそのお母さんということで記事選びにすごく悩んだ」

「わざわざ伊豆まで行き、たくさんの写真を撮ったが、でき上がった写真は、湖以外植物は全て黒くボケ、虫は何かのかたまりにしか写っていないかった」

「メモとカメラを片手に一週間ほど毎日家のまわりを歩いた。この写真はここにのせて…と考えながら写真を撮ったが、現像された写真を見てガッカリ、全部ピンボケだった」

「セミの脱皮を見つけたので、30分おきに写真を撮ったのに全部ピンボケだった」



「記事は私の大嫌いな虫、しかもカとゴキブリ、自分で書いていて気味悪くなってきたが、ウソは書けないと頑張って書いた」

「アリの糞の話を書こうと図書館に行ったが資料はなかった。そこで実際にアリを捕まえて白い紙をしいたビンに入れたが、ちっとも糞をしないので逃した。結局この記事はボツにした」等々。

#### 4) 反省点

- ①期限まぎわになって作ったので手抜きになってしまった [80]
- ②文字の書き方を工夫すればよかった [52]
- ③絵や写真をもっと使えばよかった [46]
- ④色を使ってもっとカラフルにすればよかった [38]
- ⑤内容をもっと豊富にすればよかった [37]
- ⑥幼児向きでなくなってしまった [33]
- ⑦身近なテーマにすればよかった [12]

#### 5) でき上がった時の喜び

- ①完成した時はとてもうれしかった [84]
- ②でき上がった新聞を人に見せてしまった [5]

「自分の身のまわりのことが記事になって何となくうれしかった」

「はじめて一人で新聞を作った満足感はとてもうれしい」

「イヤイヤやった新聞作りだったが、でき上がったら手離したくないような気になった」

「出来上がった時の喜びは大きく、うれしくて家族や友達に見せてしまった」等々。

以上が昭和62・63年の学生258名の感想文から、新聞を作る過程での取材の方法や苦勞した点、反省点などの一部をまとめたものである。

## あ と が き

これまで、二つのタイプの自然新聞作りの意義や過程について述べてきたが、児童・生徒の“指導作成型”と短大生の作った“自主作成型”は、取材の方法・とりあげた内容・区割りの仕方・表現の仕方などに違いはあるが、それぞれに特徴がある自然新聞であるような気がする。

いづれにしても、自然新聞作りはさまざまな能力や技術が要求され大変ではあるが、自然の学習には有効な手段であると考えられる。しかし、一回限りの新聞作りでは効果は薄い。やはり、週あるいは月ごとに継続させることが望ましいことであろう。そのためには、日頃より自然に目を向け、記録をし、書くことを習慣づけておくことが必要であろう。今回の自然新聞作りがその契機となればと思われる。

最後になったが、本稿を書くにあたって、日頃よりいろいろご指導いただき、青少年科学活動を一緒に推進してきた自然教育園の研究員諸氏、また、自然新聞作りの先駆者である平塚市博物館の浜口哲一氏に深く感謝する次第である。